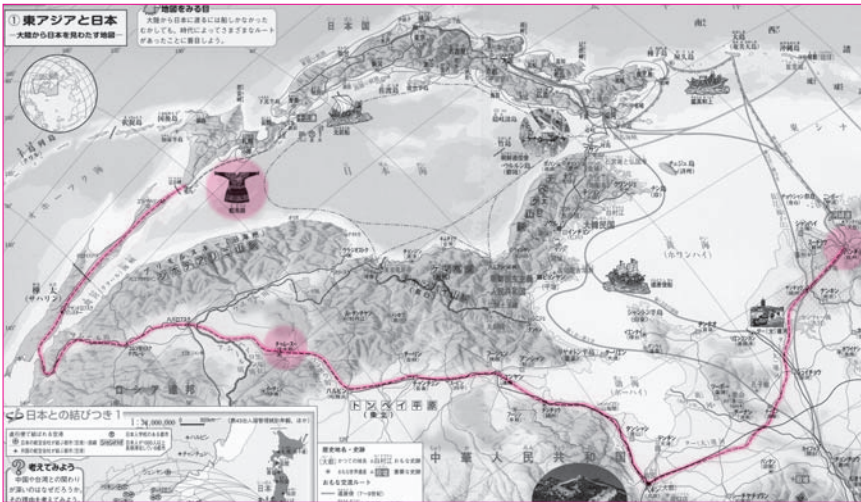


どうしてこんなに遠回り？ ～杭州発・蝦夷地経由の「蝦夷錦」～

札幌市中学校教諭

帝国書院『中学校社会科地図（初訂版）』（以下、地図帳）p.25～26からはさまざまな学習が構想できる。稲作伝来のルート探索、空海のとどった経路（松浦～福州～長安）の追跡等々。しかしながら、筆者のように北海道からこの地図を見る者の視線はどうしても北方に向かう。

地図帳p.25には小樽の近くに「蝦夷錦」の写真がある。この伝播経路をp.20で確認すると杭州を発した錦がかかるく5000kmを越えて運ばれたことになる。なぜ、こんな遠回りをしたのか？



帝国書院『中学校社会科地図（初訂版）』p.25～26

明朝時代には、黒竜江からサハリンにかけて百以上の貢納場所があった。清朝になると、松花江流域の三姓（地図帳p.25チャムスーあたり）が貢納場所となった。黒竜江流域からサハリンにいたる地域の人々がこぞってここに集まったという。彼らは貂の皮などを納め、清朝から絹などを与えられたが、特に官服は氏族長クラスにのみ与えられた。この官

服は氏族内での権威を高め、周辺諸民族に対しては高価な輸出品となった。

蝦夷地のアイヌ民族はサハリンのアイヌ民族や北方民族に貂の皮などを輸出し、この官服などと交換したのである。その官服が蝦夷地を経ての日本海交易において「蝦夷錦」となり、松前藩等に大きな利益をもたらした。

若狭の国の山中に室町期から伝わる蝦夷地との交易を謡った唄「山中踊」には、

“^{えぞ}夷が^{しま}島では^{えぞ}夷殿と 商元では何々と

唐の衣や唐糸や じんやじゃこうや鷹の羽や”
といった一節がある。北方から中国製品が運

ばれるルートは、予想以上に古くから確立していたと考えてよい。

18世紀以後、このルートの交易を日本では山丹交易と呼ぶようになる。その18世紀後半から蝦夷地を8度にわたって調査した最上徳内や文化文政期に蝦夷地に入った松田伝十郎は、蝦夷錦など中国製

品の代金代わりにアイヌ民族が連れ去られている実状を報告している。その過程に松前藩が関わっているとも記載されており、この時期の松前藩によるアイヌ民族への圧力の強さを物語っている。

参考文献：海保嶺夫『エゾの歴史』（講談社）、大石直正・高良倉吉・高橋公明『日本の歴史14 周縁から見た中世日本』（講談社）